

〔実践報告〕

アジア人財資金構想日本語教育における 学部・大学院教育への連続性

— 工学部キャンパス日本語教育コースにおけるサポート・プログラムの試み —

高 本 康 子

要 旨

群馬大学工学部・工学研究科のアジア人財資金構想事業「先進・高度ものづくりリーダー育成」プログラムには、日本語学習が必須科目として含まれる。この日本語教育プログラムは、当該事業の対象学生以外の一般学生にも、基本的に参加が許されている。実際には、参加全学生の約80%は、このような一般学生である。すなわち、当該プログラムの日本語教育は、アジア人財の日本語教育として設定された内容でありつつ、工学部の日本語教育にも寄与するものとなっていると言える。本稿はこの点に注目し、アジア人財資金構想事業が、在来の学部・大学院教育とどのような連続性を持ちうるのか、その連続性を有機的に活用するには、具体的にどのような様態がありうるのかを考えようとするものである。その一つの試みとして、当事業日本語教育における初級レベルのメイン・コース補完のために試験的に行ったサポート・プログラムを取り上げ、その概要を報告する。

【キーワード】 アジア人財資金構想 日本語教育 学部・大学院教育 工学部

1. はじめに一問題の所在

日本語コースの開始後ある程度の時間が経過した時点、例えば4月開講であるなら、5月、6月前後に来日したために、結局日本語コースに参加できない学生が出るということは、日本語教育の現場において、珍しいことではないと思われる。群馬大学工学部の場合も例外ではなく、2009年度前期においても4月のコース開始後、1週間から1ヶ月の間隔で何人かの受講希望学生がセンターに相談に訪れた。しかしこのような場合、クラスにそのまま受け入れが決まるケースは少ない。この、いわば途中参加が可能となるのは、その学生の日本語レベルがクラスの進度に適合し、かつクラス人数に受け入れの余裕がある場合に限られるからである。特に日本語未習者の場合は、1-2週間のタイムラグであっても、クラス参加者との日本語力の差はすでに大きくなっており、クラスへの受け入れが困難である場合が多い。

しかし、このような学生すべてに教員が、コースの外で、例えばマンツーマン形式で、指導を行うことも現実には困難である。特に工学部・工学研究科は、メイン・キャンパスとは別キャンパスであるため、教員数も少なく、そのような対応に割くことのできる教員の労力と時間は、ますます限定される。また、工学部・工学研究科の場合、「日本語を勉強したい」という志望は同じでも、以後の大学生活で、日本語をどの程度必要とするかは、学生によってかなり差がある。学位論文を日本語で執筆するなど、重大な必要性を、学生も、また研究指導教官も意識せざるをえない場合もあるが、学習・研究には直接日本語の必要がなく、しかし来日を機に日本語の学習を希望する場合もある。このような差異がある場合、日本語学習に使用できる時間にも、当然差が出ることとなる。

しかし、研究に日本語を必要とせず、日本語学習に充当できる時間が少ないからといって、日本語学習に対する熱意の度合いが低いということではない。研究の合間のわずかな時間的余裕を日本語学習にあて、日本語学習を、日本文化に触れる貴重な機会として活かそうとする意欲を示す学生は少なくなく、特に博士課程の学生には、そのような傾向がまま見られる。本稿はこのような留学生を対象に実施したサポート・プログラムの概要を提示し、その効果・利点、今後の課題を検討するものである。

2. プログラム概要

2.1. 対象学生

対象は①日本語未習の留学生で、②身分が研究生であるなど、プログラム実施期間中において日本語学習に時間を十分とれる見込みがあり、かつ、③学習意欲、もしくは学習の必要があるにもかかわらず、④既定のコース開始に来日が間に合わなかったためにクラスに参加できない者とした。理由は、当面の日常生活において、コミュニケーションの円滑を欠く恐れが非常にあることと、それにもかかわらず、他に日本語学習の適切な方策が見つからないことである。かつ、来日直後という、日本に対する新鮮な印象、興味が失われない時期に学習を進められることも、利点として注目した。2009年度前期において受け入れたのは以下の4人である。

学生	国籍	性別	年齢	来日時期	現在身分	次年度以降身分
A	ネパール	男性	20代前半	6月初旬	研究生	修士課程学生
B	タイ	男性	30代前半	6月下旬	研究生	博士課程学生
C	タイ	女性	20代後半	7月初旬	研究生	修士課程学生
D	中国	男性	20代後半	7月初旬	短期滞在	—

2.2. 使用教材

メインテキストは『みんなの日本語』初級 I 本冊とし、これに適宜、CD、文法解説書、問題集、ビデオなどの周辺教材を使用することとした。メインテキストに当該教科書を採用した理由は、以下の2点である。すなわち、①メイン・コース初級クラスへの連続性があること。当該教科書は10月開講のメイン・コースでも使用されるテキストであり、学生が次学期改めてメイン・コースに参加するための、準備学習としても有効性を持つと考えられる。②学生の入手もしくはアクセスが容易であること。当該教科書とその周辺教材は、工学部図書館にある程度所蔵されている。また、最も普及した日本語教科書の一つであることから、周辺の他の留学生などからも入手・調達が可能かつ容易である。また、今後のプログラム継続を考えた場合に、③文型シラバスによって構成されていることから、教員が複数となった場合にも、指導内容の統一性保持が比較的容易である。

2.3. 実施期間と構成

全体としては、6月、7月の来日直後から、次学期にメイン・コースが開講されるまで、すなわち2009年9月末までを実施期間とした。構成としては、学生の自学を中心に、それをサポートするものとして、日本語教員のカンファランスと、学生チューター、地域ボランティアの協力を組み入れるものとした。具体的には以下のような内容となる。

① 学生の自学

教科書付属の文法解説書を母語もしくは英語で読んで理解し、該当箇所のドリルを消化する。どの程度の速度で以上の内容を進めるかは、基本的には学生自身に決定させるが、教員が学生の状態を観察し、必要ならば指示を出す。希望者には更に、周辺教材を追加して提供する。

② チューターのサポートによる練習

大学のチューター制度を利用し、各学生に1-2人の日本人学生をサポートとしてつける。チューターとの練習は、使用教科書の所定の箇所について、週1時間程度行う。チューターに対しては、初回に、20分ほど日本語教員との面談の時間を設定し、どのような練習を行うのかを教員が説明する。下掲表2はその際チューターに配布する説明資料である。教員とチューターの打ち合わせは、この初回以外は原則としてしない。練習を週1時間程度に限定し、打ち合わせ等は行わない、としたのは、チューターのサポート全体における日本語練習の比率が大きくなりすぎないようにするためである。チューターはその大部分が留学生と同じ研究室・講座に所属する日本人学生であるので、研究関連でのサポートにも、十分時間がさかれるべきであると思われるからである。初回の説明時には、その研究室・講座で使用される専門の日本語についても、チューターに聞き取り調査を行った。以下は、その際チューターに手渡す説明資料である。

チューターの皆さんへ

日本語クラスで学ぶ留学生は、『みんなの日本語』という教科書を使っています。ですので、サポートは主に、この教科書の各課練習A～Cについて、下記のようにお願いします。

1. 練習A

- ① 文字を見ないですらすら言えるまで繰り返し、機械的に練習をお願いします。
- ② 必ず毎回日本人が発音し、そのあとに留学生が発音する、というようにして下さい。

2. 練習B

- ① 答えが全部ノートに書いてあるか、確認をお願いします。
- ② 文字を目で追いながらすらすら読めるまで、繰り返し練習をお願いします。
- ③ 必ず毎回日本人が発音し、そのあとに留学生が発音する、というようにして下さい。

3. 練習C

- ① 文字を目で追いながらすらすら読めるまで、繰り返し練習をお願いします。
- ② 会話のパートは、必ず交替して練習して下さい。

③ 地域ボランティアとの連携

工学部キャンパスのある桐生市には、桐生国際交流協会主催による在住外国人対象の日本語教室がある。これは地元ボランティアによるもので、週1回90分、全10回のカリキュラムとなっている。年4回開催され、基本的にオープンクラスで、随時参加可能である。クラス活動による学習効果を期待して、学生にはこの日本語クラスへの参加を勧めた。他の外国人との情報交換、交流の場ともなり、来日直後の異文化ショックの緩和にも有効であると推測される。

④ 日本語教員によるカンファランス

学生が自習した箇所について、ノートその他を教員がチェックし、問題点をピックアップ、習熟度を測る。また、文法その他について、留学生から、英語もしくは中国語で質問を受ける。更に、学習の進捗を確認し、計画をその都度修正する。原則として週1回、1時間とし、ほぼ同じ進捗の学生が複数ある場合はグループで行う。実際には、プログラム後半から、2グループにわけて実施することとなった。

⑤ 連絡簿の利用

関係者が進度をお互いに確認するため、簡単な記録簿に、教員、チューター、ボランティアが実施内容を記録する。教員はこれに基づいて随時、留学生の学習計画を調整した。

学習記録シート

年 月

学習者氏名：

担当者氏名：

担当者氏名：高本康子

担当者氏名：

担当者氏名：

(ボランティア)

(群馬大学：講師)

(群馬大学：チューター)

(群馬大学：チューター)

日(月)	日(火)	日(水)	日(木)	日(金)	日(土)	日(日)
担当：						
日(月)	日(火)	日(水)	日(木)	日(金)	日(土)	日(日)
担当：						
日(月)	日(火)	日(水)	日(木)	日(金)	日(土)	日(日)
担当：						
日(月)	日(火)	日(水)	日(木)	日(金)	日(土)	日(日)
担当：						
日(月)	日(火)	日(水)	日(木)	日(金)	日(土)	日(日)
担当：						

3. 実施結果

3.1. 実施経過

各学生に対する実施経過は以下である。

学生A	学 習 内 容	担 当 者
第1回	学習計画、教材紹介、教材入手方法確認、チューターとの打ち合わせ	講師、チューター
第2回	第1課—第4課、漢字テキスト第1課	講師
第3回	ひらがな・かたかな	ボランティア
第4回	第5—7課	チューター
第5回	第5課—第7課、漢字テキスト第2課	講師
第6回	ひらがな・かたかな	ボランティア
第7回	第8—9課	チューター
第8回	第8課—第9課、漢字テキスト第3課	講師
第9回	ひらがな・かたかな	ボランティア
第10回	第10—11課	チューター
第11回	第10課—第11課	講師
第12回	第12課	チューター
第13回	別カンファランスグループ参加（第1課）	講師
第14回	第13課	チューター
第15回	第12課—第13課	講師
第16回	第14課	チューター
第17回	別カンファランスグループ参加（第2課）	講師
第18回	第15課	チューター
第19回	第13課—第14課、漢字テキスト第1—3課	講師
第20回	第16課	チューター
第21回	別カンファランスグループ参加（第3課）	講師
第22回	第15課—第16課	講師
第23回	第17課	チューター
第24回	第17課—第18課	講師
第25回	別カンファランスグループ参加（第5課）	講師
第26回	別カンファランスグループ参加（第5課）	講師
第27回	第19課	講師
第28回	第20課	講師

学生B	学 習 内 容	担 当 者
第1回	学習計画、教材紹介、教材入手方法確認	講師
第2回	第1課	講師
第3回	ひらがな・かたかな	ボランティア
第4回	第1課	講師
第5回	第2課	講師
第6回	打ち合わせ	講師、チューター
第7回	第3課	講師
第8回	第4課	講師
第9回	第4課	チューター
第10回	第5課	チューター
第11回	第5課	講師
第12回	第6課	チューター
第13回	第6課	講師
第14回	第7課	チューター
第15回	第7課	講師
第16回	第8課	チューター
第17回	第8課	講師
第18回	第9課	チューター
第19回	第9課	講師
第20回	第10課	チューター
第21回	第10課	講師
第22回	第11課	チューター
第23回	第11課	講師
第24回	第12課	チューター
第25回	第12課	講師
第26回	第13課	チューター
第27回	第13課	講師
第28回	第14課	チューター
第29回	第14課	講師
第30回	第15課	チューター
第31回	第15課	講師
第32回	第14—15課	チューター
第33回	総復習	講師

学生C	学 習 内 容	担 当 者
第1回	学習計画、教材紹介、教材入手方法確認	講師
第2回	打ち合わせ	講師、チューター
第3回	第2課	講師
第4回	第2課	チューター
第5回	第3課	講師
第6回	第3課	チューター
第7回	第4課—第5課	講師
第8回	第4—5課	チューター
第9回	第6課	講師
第10回	第6課	チューター
第11回	第7課	講師
第12回	第7課	チューター
第13回	第8課	講師
第14回	第9課	講師
第15回	第10課	講師
第16回	第12課	講師

学生D	学 習 内 容	担 当 者
第1回	学習計画、教材紹介、教材入手方法確認	講師
第2回	第1課	講師
第3回	第3課	講師
第4回	打ち合わせ	講師、チューター
第5回	第5課	講師

3.2. 各学生についての所見

① 学生A

終始非常に意欲的であった。指定されたドリル練習だけでなく、本文や会話、問題の部分も自主的にノートしてきており、従って文字のみならず文型、語彙の定着も速やかであった。漢字の学習にも積極的で、『基本漢字500』vol.1(加納千恵子他著、凡人社)を自習しており、ドリルをノートする際には、教科書所載の漢字をすべて使用していた。従って非常に速やかに漢字スキルを身につけていると言える。また、6月の来日後、まもなくアルバイトを始めたため、日本社会との接点も多くなった。このような環境にあることは、例えば、動詞て形を導入した時点で、日本語のスタイルに普通体

と丁寧体の区別があることに気づくなど、日本語学習にも有機的に影響していたと言える。親族がすでに日本在住であり、日本語と日本事情についての知識を十分に持つ家族からのサポートがあったことも、彼の日本語学習を利するものであったと言えよう。この学生の場合、自分が多く自習すればするほど速く進むことができる、というこのプログラムの設定を、非常に肯定的に捉えており、学習意欲の向上に役立ったと言える。このように積極的な興味や態度が、今後も完全に維持されるとは考えにくいので、このような興味や意欲があるうちに、日本語学習を進められたことは、このプログラムの利点であったと思われる。

② 学生B

当初非常に緊張しており、カンファレンスの進行に支障がでるほど顕著だった。そのため、本人とともに来日していた配偶者（妻）を、最初の1ヶ月に限り付き添いとして参加させた。また、学習意欲は示しても、予習・復習などを積極的に進める態度が見えず、最初の2回は文法解説書も読んできていなかったの、厳しく注意した。第5回カンファレンスの際、チューターと教員が面談、それ以降このような態度が改善し、また緊張も緩和され始めたように見受けられた。第10回以降は、配偶者の付き添いなしで参加しはじめ、第11回以降、自分が周囲で聞き取ってきた語彙をカンファレンスの際に出すなど、積極的な態度も見え始めた。緊張も著しく緩和され、教員や同席の他の学生に冗談を言うような余裕も出てきた。自学の部分はドリル練習のみをノートしてきており、間違いは少ないが、口頭で確認すると、意味や機能が理解できていない場合もままあった。これには、自分で深く内容を考えずに、日本人学生チューターが言う通りにそのまま答えを書いている可能性が考えられる。また学内・学外（家庭）ともに大部分の時間において配偶者を同伴しているため、一日の生活のほとんどが母語を使用して過ごす状態にあった。更に、初級修了程度の日本語能力を持つ配偶者に、日本人との対話をすべて任せてしまっている面があり、その結果日本語の発話量は学生Aに比較すると非常に少なくなったと言える。本人は以後の研究において、日本各地でのフィールドワークを予定しており、少なくとも中級レベルの日本語能力が必要になると思われるが、今年度中にそのレベルに達するのは困難だと思われる。

③ 学生C

学生Bと同様に、当初は学習意欲を示しつつも、予習・復習などを積極的に進める態度が見えなかった。学生Bと同国籍で、行動も共にする機会が多かったため、学習態度の改善のペースは、おおよそ学生Bと同一であった。また、自学の部分においては間違いが少ないが、口頭で確認すると理解が不完全で、日本人学生チューターが言う通りに書いている可能性があるのも、学生Bと同様である。カンファレンスの間も、熱心にノートをとる態度が見られたが、それは文法解説書の読み込みが不十分なことによるのではないかと思われる。研究室では専ら英語が使用されているようで、日本人学生と日本語でコミュニケーションする機会は少ないように見受けられた。但し、ひらがな等の表記は非常

に丁寧であり、ゆっくりではあるが、発話にもあまり緊張した様子は見られず、積極的である。

④ 学生D

短期滞在（2ヶ月）であったため、チューターが手配されなかったことで、研究室の日本人学生が善意でサポートに加わることとなった。しかし、研究室における研究活動が忙しくなると不参加になり、全4回で終わることになった。参加時も研究活動の多忙を理由に、文法解説書さえ読んでこない場合が多かった。ボランティアクラスについても、プログラム開始時点では参加できるクラスがなく、結果としてこの面でのサポートは全く受けないこととなった。但し、学生にとっては、短期滞在でもこのように日本語学習を経験できるという一例、教員側にとっては、このような学生でも随時受け入れが可能であることを示す一例にはなったと思われる。

4. サポート・プログラムの効果と今後の展望

4.1. サポート・プログラムの効果・利点

今回実施したサポート・プログラムの効果及び利点は、以下の5点であると考えられる。

- ① メイン・コースへの連続性がある。同じ教科書で練習を積み重ねることによって、メイン・コースに入ってからより大きな学習効果が得られる可能性がある。また、特に非漢字圏の学生にとっては、漢字圏の学生とともにクラスでの学習を進める際の、有効な準備学習となると思われる。
- ② 学習者の状況に合わせて進度や内容を調節できる。学生Aの場合、上述したように、自習した分だけ先へ進める設定は、学習意欲の向上に役立った。学生Bの場合、特に最初の1ヶ月は日本語学習に対する不安が大きく、発音練習などに非常なストレスを感じている様子であったため、それを取り除くために速度を落とした。結果として、1ヶ月の経過後はかなりリラックスして授業に参加できるようになり、学習ペースを戻した。
- ③ 時間的な利点。第一に、教員によるカンファランスを1回1時間に限定したことによって、結果的に、学生の集中力の保持が容易となった。また、メイン・コースの1回2コマ（3時間）より、時間調整も容易で、予期しない予定変更があっても、学生、教員ともに柔軟な対応ができた。更に、学生Dのように途中で不参加が決定的になっても、教員側のスケジュールに大幅な変更は出ず、結果として教員の負担を最小限におさえることができた。
- ④ 日本人学生チューター活用の有効性。留学生と同じ講座の学生をチューターとすることにより、教員側では、必要な日本語レベル、語彙の範囲などを把握できた。また、チューター側も、「日本語を教える」という体験に興味を示す学生が多く、留学生の日本語学習についての理解が深まったと思われる。学生Dは短期滞在だったため、チューターではなく、講座の日本人学生の自薦による協力ということになったが、このことも、日本人学生側の興味と積極性を示していると言える。さらに留学生にとっても、同じ講座であるために、空き時間ができ次第随時、日本語のレッ

スンが可能であるという利便性があった。また、来日直後の、研究・日常生活に未知の部分が多い時期に、同じ講座の特定の学生と親しく接触することは、日本語に限らず広くプラスの影響があったように見受けられる。

- ⑤ レベルを日本語未習者としたこと。学習ペースがほぼ同じであったため、個別カンファランスではなく、同じ学生をグループにしてカンファランスすることが可能になり、クラス活動に近いものが可能となった。

4.2. 問題点と今後の課題

今回の運用において問題の主なものは、ボランティア組み入れに関するものである。第一に、時期的な問題がある。このプログラムにおいて、日本社会との接点として、桐生市国際交流協会主催のボランティアクラスの存在は小さなものではなかったと思われるが、ボランティアクラスの開催時期が合わず、まもなく夏休みに入ってしまったため、学生A以外は有効な活用がほとんどできなかった。また、第二に、クラスの内容の問題がある。学生Bの場合は、来日直後の緊張が甚だしい時期であったためもあって、ボランティアクラスの内容に「ついていけない」という感想が出た。これは、ひらがなの授業にことわざ文の穴埋めを活動として課すなど、授業内容が学生Bには適合しなかったことも、要因のひとつであったと思われる。第三に、ボランティアを起用する機会が少ないことがある。桐生市において日本語ボランティアは、このボランティアクラス以外には特に組織されておらず、他の自治体にみられるような、学生個人とボランティア個人を仲介する組織、システムはない。

その他の問題としては、本人の中での日本語学習のプライオリティ、意欲等に大きく左右されるため、プログラムとして均一の結果を出しにくく、コースとして評価しにくいことが挙げられる。

以上のことから、プログラムの拡大的運用を図っていくためには、特にボランティアとの連携の部分において、大きな問題が残されていると言える。今後は、地域ボランティアの組織化を視野に入れ、まず、桐生市及び周辺地域での日本語ボランティアの実状を把握するための調査を行う必要がある。また、プログラムを恒常的に運用するための、有効な評価方法の案出にも取り組まなければならないと思われる。

付記：女子聖学院高校の筑田周一氏にご教示をいただいた。記して感謝申し上げます。

参考文献

- 国立大学法人群馬大学（編） 2008 『平成19年度アジア人財資金構想高度専門留学生育成事業成果報告書』 経済産業省
同（編） 2009 『平成20年度アジア人財資金構想高度専門留学生育成事業成果報告書』 経済産業省関東経済産業局
フレッチャー他 2007 『ライティング・ワークショップ』 小坂敦子、吉田新一郎訳、新評論
プロジェクト・ワークショップ（編） 2008 『作家の時間』 新評論

Japanese Course of the Career Development Program for Foreign Students from Asia :

An Analysis of the Supporting Program for Students
of the Engineering Faculty

KOMOTO Yasuko

Summary : The Career Development Program for Foreign Students from Asia, in the Faculty of Engineering of Gunma University, has a required Japanese language course. This Japanese course is open not only for Career Development Program students but also for all other students of the Engineering Faculty. Therefore this Japanese course has two characteristics in its contents : one is to develop students' careers in Japanese business, and the other one is to provide chances for students to deeper their knowledge of Japanese language. The purpose of this report is to examine the supporting program of the elementary class of this Japanese course, to clarify possible further educational contributions of this program to the Engineering Faculty.